

アレクサンドリアのフィロンにおける真理*

Truth in Philo of Alexandria

原口 尚彰

Takaaki HARAGUCHI

はじめに

「真理」はギリシア・ローマ世界の哲学的探求における中心的な主題であり、プラトンやアリストテレス以来議論が重ねられてきた。フィロンはユダヤ教徒として旧約・ユダヤ教の真実理解を継承すると共に、ギリシア哲学の真理論も本格的に学んでいた。本論文はフィロンの真理解をフィロンの著作に即して積義的に分析し、旧約・ユダヤ教的真実論とギリシア的・哲学的真理論とがどのように結合しているのかを検討することにする。

フィロンの真理論については先行研究が存在しないので、全く独自の考察を行うこととなる。具体的には、フィロンの著作における真理に言及する箇所を *Philo Index* を用いてリストアップして、個々の使用例をそれぞれの文脈に即して積義的に検討し、その結果を主題的に整理し直した上で、フィロンの真理論の全体的構造を明らかにする作業を行う¹。また、フィロンの真理論の思想史的位置付けを行うために、予備的考察として、ギリシア・ローマ世界における真理解、旧約聖書における真理解、初期ユダ

* 本稿は2017年度～2020年度 科学研究費助成事業（基盤研究C「アレクサンドリアのフィロンの倫理思想：聖書学的・思想史的考察」；課題番号17K02628）による研究成果の一部である。

1 Peder Borgen, Kare Fuglseth, and Roald Skarsten, *The Philo Index: A Complete Greek Word Index to the Writings of Philo of Alexandria* (Leiden: Brill, 2000).

ヤ教における真理解を檢討することとする。

1. ギリシア・ローマ世界における真理解

古典ギリシア語において真理を表す基本的な単語は名詞アレテイア(ἀλήθεια)であり、叙事詩や歴史記述や悲劇や哲学的著作等の様々な文献に用いられている(ホメロス『イリアス』23.361; 24.407; ヘロドトス『歴史』6.69.1; プラトン『パイドロス』262c; 『国家』10.599a, 605a他)²。この単語は語源的には「隠されていないこと」、「明らかになること」から来ており、本当の現実が顕現することを意味する³。真理が問題になるのは、公になされた発言が真理を反映しているのか、それとも誤りであるのかを吟味する時であるが、その具体的内容は使われる文脈によって異なる。真理とは歴史記述においては、述べられていることが実際に起こった通りの事実であることを指す(ヘロドトス『歴史』1.182; 2.73; 6.69.1)。未来の出来事についての託宣であれば、語られたことがその通りになることが真理である(ヘロドトス『歴史』3.64.1)⁴。政治的主張であれば、真理とは発言の妥当性を意味する(アリストテレス『政治学』1281a)。哲学的探求において真理とは、真の存在を觀照することによって得られる認識のことであり、人間の思い込み(ドクサ)は真理ではない(プラトン『パイドロス』248b; 『ゴルギアス』526d; アリストテレス『形而上学』933a 30)。真理の認識はそれに適った正しい行為を随伴している。プラトン哲学において真に存在するものは目に見えないアイデアであり、目に見える現象(エイダス)はその模写や(『饗宴』211b;

2 *The Brill Dictionary of Ancient Greek* (以下、BDAGと略記)、85-86。

3 Rudolf Bultmann, “ἀλήθεια C. Der griechische und hellenistische Gebrauch von ἀλήθεια,” *TWNT* 1:239; マルティン・ハイデッガー(細川亮一/イーリス・ブフハイム訳)「真理の本質について」『ハイデッガー全集』第34巻(創文社、1995年)12頁を参照。

4 *BDAG*, 85。

212a; 『国家』 10.596d-604a)、影に過ぎないとされる (『国家』 7.514a-515a)⁵。

2. 旧約聖書における真理 (真実・信実) 理解

旧約聖書は一般的・抽象的真理を表す言葉を持たないが、言葉や事柄の真実性についてはヘブライ語名詞エメト (創24:48; 42:16; 出18:21; 申1:13; 13:15; 17:4; 王上10:6; 17:24; 代下9:5; 箴3:3; 20:28; 22:21; コヘ12:10; 詩85:11, 12; イザ9:4; 15:16; 43:9; 59:14-15; ホセ4:1; ゼカ7:9; 8:16)、あるいは、エムナーを用いて表現している (出17:12; 申32:4; 王下12:16; 代上9:22, 31; 代下19:9; 箴20:6; 28:20; 詩36:6; 37:3; 40:11; 89:2; 92:3; 100:5; 119:30, 90; ハバ2:4)⁶。両者は確かであることを意味する語根アーマンに由来するほぼ同義の名詞であり、「忠実」、「真実 (信実)」であることを表すが、真実性そのものに注目するエメトに対してエムナーは真実性に基づく主体的な姿勢や行動の方に焦点を当てている⁷。

2.1 神の真実 (信実)

旧約聖書はギリシア哲学のように普遍妥当な真理を語ろうとするのではなく、イスラエルの具体的歴史において示される神の真実 (信実) について語る (創32:11; 申32:4; ヨシュ2:14; サム下15:20; 詩19:10; 25:5; 26:3; 31:6; 33:4; 36:6; 40:11, 12; 51:8; 57:11; 61:8; 71:22; 86:15; 88:12; 89:2, 3, 6, 9; 91:4; 92:3; 96:13; 108:5; 115:1; 117:2; 119:90, 142, 151, 160; 138:2; イザ25:1; 38:19他多数)。主はイスラエルに「慈しみと信実」を示した (創24:27, 49; 32:11; 出34:6; 詩

5 Bultmann, *TWNT* 1:240; ハイデッガー『真理の本質について』23-44頁を参照。

6 *HALOT* 1:62-63, 68-69; *DCD* 1:312-313, 328-332; Andreas Jepsen, “אֱמֶת,” *TWAT* 1:313-348; Gottfried Quell, “ἀλήθεια A. Der alttestamentliche Begriff אֱמֶת,” *TWNT* 1:233-237を参照。

7 Jepsen, *TWAT* 1:341-345; Quell, *TWNT* 1:233-234を参照。

89:25, 34, 50; 98:3; ミカ7:20)。神は真実（信実）であり、父祖たちに与えた契約を守る（申7:9; サム下7:28; 代下15:3; ネへ9:33; イザ49:7; ホセ2:22; 詩25:10; 89:15, 29, 35, 38; 119:43, 160; 132:11他）⁸。神を賛美する讃歌において、真実は神の重要な属性として繰り返し言及される。神の裁きは真実であり（詩19:10; 96:13; 119:75）、その御手の業は真実かつ公平である（詩33:4; 111:7）。神の真実は永遠に及ぶ（詩100:5; 117:2; 119:90; 146:6）。

2.2 人間の真実（信実）

神の真実に対してイスラエルの側でも、神との契約を守り、神に真実（信実）をもって仕え（ヨシュ24:14; サム上12:24）、神の前に真実（信実）に歩むことが求められる（王上2:4; 3:6; 王下20:3; 代下19:9; 34:12; 詩5:2; 26:3; 86:11; 119:30; イザ10:20; 38:3; エゼ18:9）。

イスラエル人は人間相互の関係においても誠意を尽くし（創24:49; 42; 16; ヨシュ2:12, 14; 士9:16, 19）、虚偽を語るのではなく真実を語ることが求められる（箴12:17, 22; 14:5; 22:21; 28:20; 詩119:29-30, 160; ゼカ8:16）。特に、裁判において虚偽の証言をすることは固く禁じられており（出20:16; 申5:20）、証人は真実を述べることを要求されている（申17:4; 22:20; エレ42:5）。社会生活において、人は真実を求め正義と公正を行うことが求められるが（詩15:2; 45:5; 85:11-12; 111:7; サム上26:23; イザ11:5; エレ5:1; ハバ2:4）、預言者たちはしばしばイスラエルから真実と正義が失われているとして糾弾している（イザ59:4; エレ5:1-3; 9:2, 4; 7:28; ホセ4:1）。

2.3 預言の言葉の真実性

古代イスラエルにおいては、神の言葉を語ると主張する預言の

8 Jepsen, “אֱמֶת,” *TWAT* 1:337-341.

言葉の真正性が問われることがあった（王上22:16; エレ23:16-17, 25-28; 26:15）。特に民族の危機において正反対の内容の預言が語られた場合は、どちらが本当の預言であり、どちらが偽りの預言であるかを判定する必要が生じた（エレ28:1-17; 29:8-9, 30）。言葉が本当に神の言葉であれば、それは成就するが、もし神の名を語った偽りの言葉であれば成就することがないのである（エ28:9; さらに、王上17:24を参照）。

3. 初期ユダヤ教における真理理解

死海写本は旧約的な真実論を継承して神の真実（エメト／エムナー）にしばしば言及する（『感謝の詩編』VII, 29; XVIII, 29, 31; XXIII, 13-14）。神のなさる業はすべて真実（エメト）であり（『共同体の規則』I, 19; IX, 17; X, 17; 『戦いの巻物』XIII, 1, 2）、神の裁きも誤ることがなく、真実である（『ダマスコ文書』XX, 34を参照）。神は真実と正義と公平を行うのであり（『共同体の規則』I, 5）、これら三つの倫理的特質は世界を支配する神の王位を特徴付ける重要な属性である（『悪霊祓いの詩編』XXVI, 10; さらに、『共同体の規則』III, 6; 『安息日供犠の歌』V, 6を参照）。神の真実はいすラエル人が拠るべき岩である（『共同体の規則』XI, 4を参照）。

世界においては真実が確立されねばならない（『共同体の規則』IV, 19）。神との契約に入ったクムラン共同体も（I, 16, 18, 24; II, 10, 12; V, 1）、愛や慈しみと共に真実と正義を達成するように求められる（I, 5, 16; II, 24-25; V, 3; VIII, 2-3, 5, 9を参照）。共同体の成員は「真実（信実）の人（アンシェー・エメト）」であり（『共同体の規則』IV, 5; 『戦いの巻物』XVII, 8; 『神殿巻物』LVII, 8; 『感謝の詩編』VI, 2; X, 14; XVII, 5; XIX, 11）、真実の道を歩まなければならない（『共同体の規則』IV, 2, 17; VIII, 3; 『会衆規定』V, 26）。

強い終末意識に生きる成員たちは、終末に臨む世にあって神の真実の戒めを忠実に実行する「光の子ら」であると自認しており、ベリアル（悪霊のかしら）の支配下に従って悪を行う「闇の子ら」と対峙していると考えていた（『共同体の規則』I, 9, 18; II, 4-5, 16, 18; III, 13; 『戦いの巻物』I, 1）。人間の心には「真実の霊」と共に「偽りの霊」が働いており、「光の子ら」、或いは、「義の子ら」である共同体の構成員たちは「真実の霊」の支配下にあり、虚偽を忌避するが（『共同体の規則』III, 20; IV, 21, 24）、「闇の子ら」は「偽りの霊」の支配下にあって虚偽を行うこととなる（III, 21; IV, 9）。「真実の道」と「偽りの道」はかくして絶対的に対立している（IV, 17）。「闇の天使」の働きによって「光の子ら」も罪を犯す誘惑を受けるが、イスラエルの神と「真実の天使」が彼らを助ける（III, 24）。

ヘレニズム時代以降に書かれたユダヤ教文書は旧約的な真実論を継承しつつも、ギリシア思想とも接点を持ち、その真理論の影響も受けている。シラ書は旧約聖書の真実論に立っているが、この知恵文学書においては神の真実を背景とした人間の真実（信実）の方に焦点が当たっている。イスラエル人は律法を守り、信実（ピステイス）を实践することが求められる（シラ15:15）。シラ書はアブラハムについて、「彼はいと高き方の律法を守り、その方との契約に入った。その身において契約を確立し、さらには試練の中で信実である（ピストス）ことが判明した」と述べる（シラ44:20）。ここで言及されている試練とは創世記22章に語られているイサクの奉獻のことであり、この劇的な出来事を通してアブラハムの神への信実が示されたと解釈している（I マカ2:52; シラ44:19-23; ヘブ11:17; ヤコ2:21-24を参照）⁹。他方、サムエルやイザヤら預言者については、神の言葉を告知する職務への忠実（信実）ということが強調されている（シラ46:15; 48:22）。

シラ書は人間の間においても偽りを避け真実を語ることと

(34:4-8; 37:26; 40:12, 41:16)、他者に対して誠実であることを求める (22:23)。知者は知恵を追い求め、知恵を愛することが勧められる (4:11-14)。知恵は言葉によって知られるのだから、知者は真理 (アレーテア) に逆らって発言することがないように戒められる (4:24-25)。著者は読者に対して「真理にあって」主の道に歩むことが出来るように、主に祈り求めるように勧めている (シラ37:15)。

知恵の書は、「主を信じた者は真理を悟り、信じる者たちは愛にあって主の下に留まる。恵みと憐れみが選ばれた者たちにあるからである」と述べて (知3:9)、神を信じる者が真理を認識することを強調する。このユダヤ教文書は一神教的宗教観を普遍的真理として展開する。神への信仰に歩むことは、「真理の道」を歩むことに喩えられ、神を信じない者はそれを踏み外したとして非難されている (5:6)。知恵の書は神々の像を神殿に安置して拝んだり、動物や死んだ人間を神格化して拝んだりする、当時のエジプトやギリシア・ローマ世界の多神教的世界の実態を踏まえて批判を加えている (知11:15; 12:23-24; 14:15-21)。偶像礼拝の誤りは、神でないものを神と取り違え、世界の創造主なる真の神の存在を認めて拝まないことに帰結する (11:15; 13:1-2, 10-19; 14:1-11; 15:14-19)。ギリシア・ローマ世界の知者も神が創った世界の秩序ある美しさを認めながら、その支配者の存在を認め、帰依するには到っていない (13:3-9)。この根本的な無知や誤りから、偶像礼拝が生じ、倫理的な混乱を引き起こしているのである (14:12-14, 22-31)。真に存在するのは神だけであり、創造主なる神は全能であり (11:17, 23)、真実 (アレーテース) であり (15:1)、

9 Geza G. Xeravits, "Abraham in the Old Testament Apocrypha," in Sean A. Adams and Zanne Domoney-Lyttle eds. *Abraham in Jewish and Early Christian Literature* (London - New York: T & T Clark, 2019), 30-35.

義である (12:16)。

他方、ユダヤ人の歴史家であるフラビウス・ヨセフスにとっての関心事は史実を正しく語ることであり、真理とは現実に存在する事実に他ならない (『ユダヤ古代誌』 2.60; 16.108; 『ユダヤ戦記』 1.595; 『自伝』 40)。こうした真理解はギリシア・ローマ世界の歴史家たちの真理解と一致する (ヘロドトス『歴史』 1.182; 2.73; 6.69を参照)。ヨセフスが歴史記述を試みる意味は、ヘレニズム世界に存在するユダヤ人に関する誤った理解を退け、ユダヤ人の歴史の中で本当に起こった事実を書き残すことである (『ユダヤ古代誌』 1.4; 『ユダヤ戦記』 1.6, 17, 30)。

ヨセフスは具体的な出来事を叙述する過程で、イスラエル人が持つ神への信実 (ピステイス) について語る (『ユダヤ古代誌』 17.179; 『ユダヤ戦記』 3.391)。また人間の倫理的資質としての信実・誠実についても言及している (『ユダヤ古代誌』 17.246; 『ユダヤ戦記』 2.121, 135, 257)。

4. フィロンにおける真理

4.1 虚偽の反対概念としての真理

フィロンも当時の古典古代の慣例に倣って真理に言及する際には、名詞アレーテイア (ἀλήθεια) を用いている (『創造』 21, 45, 132; 『寓意的解釈』 2.10, 56; 3.36, 45, 128; 『ケルビム』 83; 『供物』 13, 27, 28他多数)。フィロンは真理 (アレーテイア) が虚偽 (プセウドス) の反対概念であることを強く意識しており、虚偽と対照しながら真理について論じることが多い (『寓意的解釈』 3.231; 『移住』 110; 『夢』 1:220; 『モーセの生涯』 1.24; 『十戒』 6, 91, 138; 『律法各論』 1.89; 2.53; 4.44, 52; 『徳論』 214, 219, 221; 『観想的生活』 39; 『神の不動性』 69, 76)。真理の主張は虚偽との闘いを内包しており、論争的な意味を含むのである。

真理の具体的内容は真理が問題となる文脈によって様々であ

る。法的な審理の場面では真理とは争われている事柄についての事実であり、虚偽とは事実と反する主張や証言のことである（『十戒』 91, 138; 『律法各論』 4.52; 『フラックス』 96, 97, 106）。裁判は真理発見のプロセスであり、裁判官は原告と被告の弁論や証人の証言を聞いて状況を判断し、何が真実であるかの判断を下すことになる（『フラックス』 106）。

神学的・宗教哲学的な事柄に関して世界の起源や神の存在を論じる文脈では、真理とは天地の創造者なる唯一の神の存在の認識であり、虚偽とは人間によって創作された神話や虚構の物語によって語られる神々の世界である（『創造』 1, 170, 171; 『ケルビム』 86; 『寓意的解釈』 3.228, 229; 4.178; 『移住』 110; 『自由』 74; 『十戒』 6, 91, 138; 『律法各論』 1.28, 51; 『賞罰』 162; 『徳論』 65, 102）。異邦人世界に流布する神々の物語を当時の周辺世界の大多数の人々が受け入れていたのであるが、フィロンによればそれらは単なる人間の思い込み（ドクサ）に過ぎないのである（『ケルビム』 83; 『寓意的解釈』 3.23; 『アブラハム』 123）。フィロンの真理論は見えざるイデア界の存在を強調するプラトンの認識論を（プラトン『饗宴』 211b; 212a; 『国家』 10.596d-604a）、旧約・ユダヤ教的な唯一神の存在の認識に援用したものである。この立場からすると、見えざる神が言葉によって世界を創ったのであり（創1:1-2:4a）、目に見える現象界は神が創造した被造物に他ならない。被造物は神の栄光を写すことがあるが（詩8:2-10; 19:2-7; 知13:3-9）、神的な存在そのものではない。

4.2 神と真理

4.2.1 神についての真理

旧約・ユダヤ教の基本的認識は、実在する神は天地の創り主なる神だけであるということであり（創1:1-2:4a; 出20:3; 申5:7; 6:4; イザ43:10; 45:6-7）、真の神ではない異教の神々を拜むことは偶像

礼拝として固く禁じられている（出20:4-6; 申5:8-10）。ユダヤ人哲学者であるフィロンも、こうした一神教的世界観を基礎に哲学的考察を行っている¹⁰。フィロンによれば、本当に（プロス・アレクティアン）存在するのは真の活ける神だけである（『アブラハム』80, 143; 『律法各論』1.28; 『徳論』65, 102）¹¹。異教の神々は実在することはなく、人間が創作した物語である神話によって存在すると思われているだけである（『律法各論』1:51）¹²。神は創り主であり、信じる者の父である（『モーセの生涯』2.46）。

一神教的な宗教観に基づいて周辺世界の多神教的な宗教観を批判することは、既に第二イザヤに見られる。捕囚期末期に活躍した第二イザヤは、創造主なるイスラエルの神のみが実在しており、他に神は存在しないことを主張する（イザ43:10; 45:6-7）。周辺世界に見られる神々の像は職人が作った創作品に過ぎず、人を救う力はない（44:9-20）。

同様な多神教的宗教観の批判は、先に見たようにヘレニズム期のアレクサンドリアで書かれたと推定される知恵の書11-15章に先鋭な形で展開されている（知11:15; 12:23-24; 14:15-21）。初代教会の宣教師パウロも知恵の書の作者と同様に、人の手で作った神々の像を神殿に安置して拜んでいる異邦人世界を念頭に置きながら、神認識の問題を論じている¹³。ローマ書の冒頭でパウロは、不義をもって真理を妨げている人間たちのあらゆる不敬虔と不義

10 大貫隆「フィロンと終末論」『生活大学研究』第5巻、2020年、15頁を参照。

11 Maren R. Niehoff, *Philo of Alexandria: An Intellectual Biography* (New Haven: Yale University Press, 2018), 93-95.

12 Karl-Gustav Sandelin, "Philo as a Jew," in *Reading Philo: A Handbook to Philo of Alexandria* ed. Torrey Seland (Grand Rapids: Eerdmans, 2014), 23-24.

13 詳しくは、原口尚彰『ローマの信徒への手紙 上巻』新教出版社、2016年、82-90頁を参照。

と述べているが、この句における「真理」とは（ロマ1:25）、神は唯一であり、創造主なる神だけであるという事実のことである（ロマ2:30; 4:11-12; Iコリ8:4, 6を参照）。敬神は、ギリシア・ローマの倫理思想において正義や思慮や節制や勇気と並ぶ主要な徳目として挙げられる（プラトン『国家』1.331A; 4.427E; 10.615C; 『法律』1.630B, 631B-D, 888BC; ディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』3.80,83; 7.92, 102を参照）。ヘレニズム世界の考える敬神とは、オリュポスの神々等のギリシア・ローマ世界の神々を敬い、仕えることである（プラトン『国家』10.615C; アISKYロス『アガメムノン』338; デイオドロス・シクーロス『歴史叢書』4.39.1他）¹⁴。しかし、ユダヤ人であり、キリスト者であるパウロにとって、敬神とは天地の創り主なる神を敬い、仕えることであるので、異教の神々を敬うことは、むしろ、忌むべき偶像礼拝（出20:4-6; 申5:8-11）であり、不敬虔且つ不義であり（詩73 [72]:6; 箴11:5）、「不義をもって真理を妨げる」ことと評価される¹⁵。この発言は周辺世界の多神教的宗教文化そのものを断罪しているのである。他方、国家や共同体の守護神である先祖伝来の神々を人間が作った偶像として拝まないユダヤ教徒やキリスト教徒の態度は、多神教的な宗教観を持つ周辺社会の人々からは、奇異なものと受け取られ、「無神論者」や「人間嫌い」という非難が浴びせられている（ヨセフス『アピオン駁論』2.148; デイオ・カッシウス『ローマ史』14.2; エウセビオス『福音書への序文』1.2.2）¹⁶。

14 D. Kaufmann-Bühler, "Eusebeia," *RAC* 6 (1966): 985-1052を参照。

15 原口尚彰『ローマの信徒への手紙 上巻』新教出版社、2016年、84頁。

16 M. Stone, *Greeks and Latin Authors on Jews and Judaism* (Jerusalem: The Israel Academy of Sciences and Humanities, 1974), 1.155; 2.380, 447.

4.2.2 神の真実（信実）

フィロンは旧約聖書に神がイスラエルの父祖たちに対して誓約をしたという記事があるのに注目し（出11:11-13を参照）、神が誓ったことの意義について論じている（『供え物』89-97）。誓いは通常何かしらの疑念がある時に、神を証人として引き合いに出し、自己の発言が真正であり、信頼に足ることを強調するためになされる。しかし、神が誓う場合、神にはそもそも何も不確かなことはなく、疑念を抱く余地はないにも関わらず、神はご自身の言葉の真理性を明らかにすることになる（『供え物』91）。この場合の神の言葉の真理性とは、嘘をつかず常に真実を語り、また、与えた約束の言葉は必ず守ることに帰着する。神の言葉は誓いによって信頼性を増すのではなく、逆に神の言葉であることによってその誓いの真実性が増すのである（『供物』91-93）。

この場合の神の真理（アレーティア）とは神の信実（ピステイス）とほぼ同義であり、民との契約を忠実に守ることを意味する。ディアスポラ・ユダヤ教が用いていた七十人訳聖書ではアレーティアもピステイスもエメト／エムナーの訳語となっており、両者は互換的である。旧約聖書はイスラエルの歴史において示される神の真実（信実）について語る（創32:11; ヨシュ2:14; 詩25:5; 26:3; 40:11; 57:11; 61:8他多数）¹⁷。フィロンもイスラエルの救済史において示された神の真実を語る際にはユダヤ人思想家として旧約聖書の真実論の上に立脚している。

同様の傾向は、フィロンと同時代のユダヤ人であり、キリスト教宣教者であった使徒パウロにも見られる。パウロはローマ書3章においてパウロはユダヤ人であることの利点を論じる関連で、イスラエルの救済史において顕された神の真理の問題に言及して

17 この点については、原口尚彰『パウロの宣教』教文館、1998年、198-199頁を参照。

いる（ロマ3:4, 7; さらに、15:8を参照）。イスラエルの民は、神の言葉として律法の戒めを託されたのに、それらを忠実に守ることをしなかった。しかし、パウロによれば民の不信実や偽りによって神の真理や信実は無効とならない（3:3-4）。神が世に下す裁きにおいては、人間の偽りに対して神の信実が際立つ結果となる（3:3）。救済史においては、人間の側の偽りを乗り越えて、神の信実が真理として示されるのである¹⁸。

4.3 人間と真理

4.3.1 真理探究者としての人間

神は人間を知恵に導く導き手であり（『律法各論』2.237; 『予備教育』114; 『自由』64）、神の真理は世界を照らす光である（『自由』96; 『移住』76; 『逃亡』139）¹⁹。真理は理性による思索によって認識することが出来るとされ（『創造』77; 『モーセの生涯』1.48; 『律法各論』3.45, 124）、創造主の認識は哲学の源である（『律法各論』2.186, 237）。哲学（フィロソフィア）とは知恵を愛することであり、哲学的思索はそれを通して真理の認識（＝知恵）に到る道に他ならないからである（『カインの子孫』101-102; 『相続人』214; 『予備教育』79）。それに対して、ソフィストたちの議論は言葉巧みであっても人間的な意見（ドクサ）に過ぎず、人を真理に導くことはない（『賞罰』8; 『夢』1.220, 235）。

信仰者は真理を愛する者であり（『夢』2:19; 『律法各論』2.58; 『観

18 Christof Landmesser, *Wahrheit als Grundbegriff neutestamentlicher Wissenschaft*. WUNT 113 (Tübingen: Mohr-Siebeck, 1999), 246-247を参照。

19 Rainer Hirsch-Luipold, "Unterwegs zu Weisheit und Heil. Philons Interpretation von Abrahams Auszug als Zeugnis der religiösen Philosophie der frühen Kaiserzeit," in *Abrahams Aufbruch*, Maren R. Niederhoff und Reinhard Feldmeier eds. (Tübingen: Mohr-Siebeck, 2017), 173を参照。

想的な生活』64)、真理の探究者である(『十戒』65;『自由』12;『律法各論』1.59,63; 2:181;『徳論』182)。イスラエル人たちは既に旧約時代に神の言葉である律法の中に真理を見出していたが(ネヘ9:13; 詩19:8; 119:29-30, 86, 142, 151)、フィロンによれば真理を体現する律法を学ぶことこそ信仰者に相応しい哲学的営みである(『カインの子孫』102)。律法を学んで実践することに努めるユダヤ教は、「先祖伝来の哲学」と呼びうる(『夢』2:127;『モーセ』2:216)²⁰。毎週トラー(律法)が読まれその説き明かしがなされる安息日礼拝は、ユダヤ人たちが「先祖伝来の哲学」より知恵を汲み取り、哲学的訓練を受ける場である(『観想的な生活』28;『ガイウス』156)。モーセ五書は世界の成り立ちについての考察や、人間が守るべき倫理的教えを含んでいるからである(『改名』77;『律法各論』3.1, 191; 4:92;『観想的な生活』68)。

4.3.2 知者としての人間

ユダヤ教の伝統ではモーセ五書の著作性がモーセに帰せられているが、フィロンはモーセを五書の著者としてしばしば知者と呼んでいる(『律法の寓意的解釈』2.87, 93; 3:45, 131, 140, 141;『移住』38, 168, 201;『相続人』21)。それはモーセが神の知恵を汲み取って著作をしたと考えられるからである(『律法の寓意的解釈』2.87)²¹。シナイ山において律法を授与され、民に伝えたモーセは(出20:1-24:18;申5:1-33)、知恵に満ちた立法者とされる(『酔い』1)。神の知恵は真理を体現するので、モーセは神の意思の解釈者

20 Harry Austryn Wolfson, *Philo: Foundations of Religious Philosophy in Judaism, Christianity, and Islam* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1947), 1:147; Gregory Sterling, “The Jewish Philosophy: Reading Moses via Hellenistic Philosophy according to Philo,” in *Reading Philo: A Handbook to Philo of Alexandria*, ed. Torrey Seland (Grand Rapids: Eerdmans, 2014), 129.

21 Böhm, 60-61を参照。

であると同時に、真理を探究する哲学者でもある（『相続人』301; 『改名』209）。

フィロンはイスラエルの父祖アブラハムを「義人」と呼ぶ（『移住』110, 121; 『相続人』94）。それは創世記15章6節において、「アブラムは神を信じて、そのことが義と認められた」と述べられているからである（『律法の寓意的解釈』3:228; 『改名』177, 186, 218; 『相続人』94）²²。他方、創世記22章にあるアブラハムのイサクの奉獻の行為を（創22:1-19）、フィロンは「神の前に喜ばれる」ことであると述べる（『改名』39, 40）。創世記22章のイサクの奉獻の出来事においてアブラハムが試練に打ち勝ったことを、フィロンはアブラハムが義と認められた根拠であると考えている（『神の不動性』4）。同様な考えは他の初期ユダヤ教文書にも見られる（Iマカ2:52; 知10:5; シラ44:19-21; ヨベ18:14-16）²³。初期ユダヤ教にとり、神への信実（信仰）と善き業は対立するものではない。神に喜ばれる善き業（正義）は神への信実（信仰）の現れであり、両者は一体であると考えるのである（Iマカ14:35を参照）。

フィロンはアブラハムを義人とするばかりでなく、度々知者（ソフォス）と呼んでいる（『移住』94, 109, 122; 『相続人』2, 88, 91, 258, 280, 313; 『アブラハム』77, 80, 82, 84, 109, 118, 132; 142, 168, 202, 213, 229, 255, 261, 272, 275）。アブラハムは知者であり、知恵を愛する者（＝哲学者）である（『改名』70）。しかし、人間の知恵の究極は、私たちが何も知らないことを知ることであり、神のみが知恵ある方であることを知ることである（『移住』134）。この立場は、無知の知を説いたギリシア哲学者ソクラテスの考え

22 七十人訳聖書の翻訳は特に断らない限り、筆者の私訳である。

23 Geza G. Xeravits, "Abraham in the Old Testament Apocrypha," in Sean A. Adams and Zanne Domoney-Lyttle eds. *Abraham in Jewish and Early Christian Literature* (London - New York: T & T Clark, 2019), 30-35.

に近い（『ソクラテスの弁明』21dを参照）。人間的な考え（ドクサ）ではなく、知恵の淵源である神の意思に従うことこそが、真の知者と呼ばれるに相応しいということになる。自分の考えではなく神の言葉に従ったアブラハムの行動は、無知の知を実践する模範的例である（『移住』130）。

4.3.3 人間の徳としての真実

ユダヤ人はモーセの十戒によって隣人について偽証することは禁じられている（出20:16; 申5:20）。フィロンの著作においてもユダヤ人が裁判において真実を語る事が当然の前提になっている（『十戒』91, 138; 『律法各論』4.52; 『フラックス』96, 97, 106）。

さらに、フィロンは裁判の場面だけでなく、広く社会生活において嘘を言わず、真実を語ることを人間の徳の一つとして称揚している。明確さと真理は対として言及されることが多い（『モーセの生涯』2.113; 『律法各論』1.88）。また、真理を語ることは、敬虔であることや正義を行うことと並ぶ人間の徳の一つとされている（『供え物』27, 28; 『モーセの生涯』2.237）。

5. 結論と展望

フィロンの真理論は非常に哲学的であるが、彼はユダヤ人哲学者であるので、ユダヤ教の大前提である一神教的世界観を基礎に哲学的考察を展開する。フィロンによれば、実在するのは天地の創り主なる神だけである（『アブラハム』80, 143; 『律法各論』1.28; 『徳論』65, 102）。異教の神話が語る神々は実在することはなく、存在すると思われているだけである（『律法各論』1.51）。

旧約聖書に神がイスラエルの父祖たちに対して誓約をしたという記事がある（出11:11-13; 『供物』89-97）。この場合の神の真理（アレテーア）とは神の信実（ピスティス）と同義であり、民との契約を忠実に守ることを意味する。旧約聖書はイスラエルの歴史

における神の真実（信実）を語るのを常とする（創32:11; ヨシュ 2:14; 詩25:5; 26:3; 40:11; 57:11; 61:8他多数）。フィロンも旧約聖書の真実論を継承して、イスラエルの救済史において示された神の真実を語る。

フィロンはユダヤ教信仰の持つ哲学的性格を強調する。信仰者は真理を愛する者であり（『夢』 2.19; 『律法各論』 2.58; 『観想的生生活』 64）、真理の探究者である（『十戒』 65; 『自由』 12; 『律法各論』 1.59, 63; 2.181; 『徳論』 182）。律法を学ぶことは信仰者に相応しい哲学的営みである（『カインの子孫』 102; 『夢』 2.127）。毎週トーラー（律法）が読まれその説き明かしがなされる安息日礼拝は、ユダヤ人たちが「先祖伝来の哲学」より知恵を汲み取り、哲学的訓練を受ける場である（『観想的生生活』 28; 『ガイウス』 156）。

ユダヤ人はモーセの十戒によって隣人について偽証することは禁じられている（出20:16; 申5:20）。フィロンの著作においてもユダヤ人は裁判において真実を語ることが求められる（『十戒』 91, 138; 『律法各論』 4.52; 『フラックス』 96, 97, 106）。さらに、広く社会生活において嘘を言わず、真実を語るとは敬虔であることや正義を行うことと並ぶ人間の徳の一つとされている（『供物』 27, 28; 『モーセの生涯』 2.237）。

フィロンの真理論は、ユダヤ教的な唯一神論に立ち、神の意思の啓示である律法を学ぶことを真理探究の哲学的な営みとして提示している。このことを通してフィロンはユダヤ教が非理性的な迷信ではなく、ギリシア・ローマ世界の知識人が受け入れることができるような理性的宗教であることを示そうとしていると思われる。